

「現在の巨大メディアの問題点」及び「ネット社会の闇」

「スマートフォン中毒」や「ネットゲーム中毒」という重大

な精神疾患=病気であるという自覚の必要性

「ヴァーチャル・リアリティー」のむなしさ及び無価値性の認識

この項目のテーマは、「メディアやネットワーク情報に操られない、人間らしい人間」の構築そして機械やコンピューターやAIに支配されないように注意して

「生身の人間」に立ち返ろう

「生身の人間」であることを楽しもう ということになります

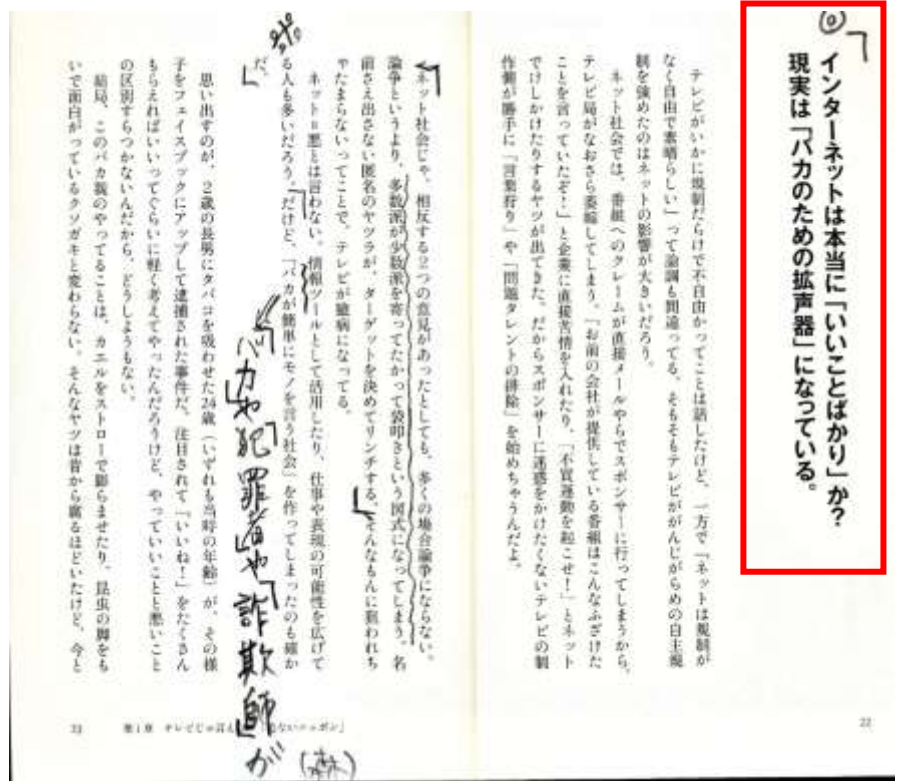
この項目についてはすごくたくさん書籍があり、月刊誌や週刊誌そして日刊新聞に毎日のように取り上げられ議論されていることなので、志成館のASSETSでそれらの中で個々の項目に該当するものを、主に毎日新聞と朝日新聞の記事を中心に今後少しずつ掲載します。

まずは最初に、最近発刊された日本一有名なお笑い芸人であるビート・タケシの書籍を数冊紹介します。

ASSETS OF OUR LIVES

2017年11月20日 第31巻20号

ここ30年以上も間の「日本を代表するお笑い芸人」であるとともに、「日本社会のゆがみを面白くおかしく指摘し続けた評論家」でもある、ビート・タケシ氏の著書の紹介です。この書物の名前も「テレビじゃ言えない」というものであり、ひょうきん(=笑わせるような部分)な感じがします。しかし表紙の鉢巻きに写っている彼の写真を見てください。まじめで誠実で物憂げな顔をしていると感じませんか？ そうなのです、この本はとても立派なメディア論であると共に、現在の日本が抱える病巣(病気ないし社会的な問題点)を鋭く指摘したものであります。君たちはまじめな態度で、彼が何を伝えたいかを考えながら、この名著を読む必要があります。館長は真剣な気持ちでこの本を紹介しています。そしていくつかのページを真剣に読んでいただきたい記事のうちのほんの一部をこの紙に張り付けています。興味がある人は購入して読んでください。



① インターネットは本当に「いいことばかり」か？
現実には「バカのための拡声器」になっている。

「ネットで調べれば何でもわかる」と考えるヤツは、
 「そこに書かれていないもつと深い世界」に思いが至らない。

さっきは「ネットがバカの拡声器である」と話した。過激すぎるレッテル貼りと思われるかも知れないけど、オイラは実際もつと深刻じゃねえかと思ってる。みんな、どれほどスマホとネットに依存しているか、まったく自覚していないからだ。
 最近、ハロウィンというニッポン人に馴染みのない文化で若いヤツらがバカ騒ぎしている。これも「スマホとネットありき」のブームだろう。仮装をして、その日限りでもいいから「スター」になって注目を集めたいって考えるのは、その姿をSNSでいろんな人に拡散できるからだ。誰にも気がついてもらえないなら、わざわざそんな手間のかかることはやらないだろう。キラキラネームを子供に付ける親も、ハロウィンで目立とうとするヤツも、みんな無頓着に同じだよ。お手軽にできる「他人とは違うこと」をやって目立ちたいって、それは本当の「個性」とはまったく違う。うつせいなものだよ。

そんなことを言ってるオイラも、実はスマホを使わないワケじゃない。カメラ代わりに写真を撮ったり、思いついたネタやアイデアをメモしたりすることもある。[けど、アレに一日中かじりついでるのは正気じゃない。本当に大事にしたいことじゃない自分の時間を削りながら、ことに気がつかないやいけ]

「女子高生が1日7時間スマホをやってる」なんて調査もあった。その代わり、本や雑誌を読まなくなったし、テレビも見なくなったと言われてる。
 コミュニケーションやエンターテインメントのツールとしてスマホが役に立ってるのは認めらるけど、かといって「ネットで調べればいいから知識はいらない。要はネットを使いこなす能力」みたいな風潮は絶対おかしいね。
 「映画を作ったり、芸術作品を作ったりするときは、かなり専門的で深い知識と理解が求められることがある。だからオイラも調べ物をすることがある。だけど、そんな時に

ネットで調べても、本当に知りたいと思ふ情報はほとんど出てこない」過激に聞かされた噂や、間違った情報は論外。正しい情報だとしても、ネットで見つけるのはどこかの雑誌や新聞の引用。いわゆる又聞きばかりで、その「世」まで到達しない。本場の意味で「調べると」ということは、専門書を読んだり、その道の権威に話を聞いたりする。「ネットに出ていないくらい深い内容を掘り下げる」と「なんだよ」
 「ネットがあれば何でもできる」と思ってる世代は、「世の中にはネットじゃ調べられないもつと深い世界がある」ということに思いが至らない。それが困るんだよ。そのことに気づいていけばいいんだけど、そうじゃない気がするね」

①「スマホの通信料」ってのは、現代社会における「年貢」みたいなものじゃないか。最終的に儲けてるのは、通信会社とアプリを作ってるヤツらだけ。賢くて、情報を持つてる人間だけが、1人月5000円〜1万円という巨額のを手に入れてる。
 ②「起業家は、いけば現代の戦国大名だよ。一連行のスマホを手に入れたぜ」最新のアプリをダウンロードしたよ」なんて喜んでるヤツらは、そういう「儲かる仕組み」を作

「自分は決して強い者の味方はしない」「強い者や権力者を批判するためにジョークを飛ばしており」「自分の本心を誤解しないでほしい」という、ビート・タケシ氏による自分自身の釈明の文章です。左のページの「そのスタンスは真逆だぜ」という文章がそのことを表しています。彼がどうして多くの人に愛され続けているかの理由がわかっていただけでしたか。どん底の生活をした経験のある人間の、優しい思いやりを彼は持ち続けているのです。だからみんなに優しい人気は落ちないのです。

いでき、
 で、プ
 ったん
 るんだ
 「アメリ
 カネは
 な人たち
 ザとそう
 これを
 得しちま
 そう言
 ってきた情報によれば、ネット上じゃ「トランプが大統領になるのは、ニッポンでビートたけしが大統領になるよりなもの」って論調があるんだって？
 「オイラが「核武装しちやえ」とか「ジジイ・パパアを姥捨て山に」なんてヒンシユク丸出しのネタをやってるうえに、トランプと一緒に過去にスキヤンダルを山ほど抱えてるってことで「似てる」って声が出てきてるらしいんだけどさ。
 別に「なるほど」と納得するのは勝手だけど、この論はひとつ大きなことを忘れているよ。オイラは若い頃から「笑いのネタ」としてこういう話をしている、要はこういう極端な話で「政治」やら「社会」の「ヘンな部分を横から突っついているわけだよ」一方でトランプは、「政治」という土俵に乗っちゃって、大マジメに極論を言ってるわけだよな。
 これってたとえ同じ「極論」を説いていたとしても、そのスタンスは真逆だぜ。こっちはお笑いだから許されるんであって、トランプみたいな拳を振り上げたことなんてないんだ。そのことに気がつかないやダメだよ」
 だけど、その説に乗っちゃって、オイラが「トランプに倣ってオイラも！」って極端な政策で選挙に出たら笑うよな。

「写真ほしくない」みたいなことを言
 んだって。試写をやって反応を見
 ゃい田舎の映画館だつて。つまり
 って意味らしくてさ。
 なくて、トランプに投票したよう
 だよ。マーケティングをして、ワ
 過ってたんだな」と、ミヨーに納
 担当編集者のアンチャンが仕入



【左】 ついでビートたけしさんによる「バカ論」という本の紹介をここでしておきます。上の本と合わせてよむと、彼が何を訴えようとしているかがわかると思います。私と同じように、「温かい心を持った人間らしくなれ」と言っているだけの事なのです。この本も芸人論ではなく、「人生論」として読んでください。

【次のページの左上】 彼に文才があればよい小説家になれると思います。そんな彼が又吉氏の芥川賞受賞に対抗して試しに本を書かれたのでしょうが、「アナログ」の表紙を載せます。テレビの朝番組で、彼自身がこの本の紹介をされていたのですが、次の日は番組をすっぽかして、太田光さんが困っていました(笑)

【下の下】 「バカ論」の結びのところでは、志成館の館長の授業を現在受けている人や過去受けてきた人は、タケシ氏が行っていることと森館長が授業中に言っている事に似たところが多いことに気づかれると思います。年齢もあまり変わらないし、したがって生きてきた時代も変わらないので似たようになっているのだと思います。(笑)。彼も館長も温かい心を持った人たちの中で、幸せに生きてこられたのかもかもしれません。

第三章 渡る世間はバカばかり 87

伊集院静に聞け、バカ野郎／「やりたい仕事が見つからない」／「夢をあきらめないで」と言うバカ／自分を探すバカ／「老後をどう過ごせばいいのか」／希望は「孤独死」／「これからの日本の行く末が心配です」／「国立阿片窟」を建設せよ／ネットは長屋の水場／コピーが本物を上回る時代／おいらの守護霊対談／「私と仕事、どっちが大事なの？」

第四章 バカがテレビを語っている 113

テレビは「オワコン」か？／テレビ不遇の時代／「じゃあ、お前がやってみろ」／いつまでも欧米を手本と思うなよ／くだらないネットニュース／それでもテレビはつまらない／なぜテレビはつまらなくなったのか？／「自分が主人公」の時代／失われるリアルタイム／ラブホテルでカラオケを歌うバカ／もはや視聴率に意味はない

はじめに——バカは死んでも治らない 3

第一章 バカなことを聞くんじゃない 15

初めてのインタビュ／「FRIDAY事件」／「お子さんは何人欲しいですか？」／他人の不幸は蜜の味／大ダスキの石原慎太郎／「がんばれベッキー」／男女の関係はあつたんですか？／バカな芸能レポーター／「離婚の原因は何ですか？」／「〇〇さんはお元氣ですか？」／バカな通販番組／バカなテロップ／「あくまで個人の意見です」／バカなコメント／「ファンにひとことお詫びはないんですか？」／ビートたけしの「こんなインタビュアーはイヤだ！」

第二章 バカ言ってるんじゃない 49

「バカ正直者」のトランプ／民主主義はバカのもの／バカが総活躍する時代／開抜けな「働き方改革」／芸能界に「残業」はない／たけしさんは、いつ寝てるんですか？／芸人と素人の境界／バカな弟子入り志願者からの手紙／芸人になりたいのか、芸がしたいのか／ビートたけしの弟子です／「どうしたら漫才師になれますか？」／「どうしたら売れますか？」／芸も世に連れ／芸を盗むセンス／芸人はボランティアじゃない／落語からセンスを盗む／センスは



おわりに——バカな言い訳

バカな質問からバカな発言、バカな若者に老人、バカなテレビにネット、おいらの好きなバカ……と、ここまでさんざんバカについて考えてきた。しかしこうもバカを連発していると、さすがにうんざりしてくる。それにこれ以上、どいつもこいつもバカばかりなんて言っていると、いろいろなところからお叱りを受けちゃう。

でも、おいらが育った東京の下町だと、「バカ」というのは、「おい、このバカ、元気か？」なんて挨拶代わりの言葉。

英語だと、「You know」みたいなニュアンス。「大丈夫か、バカ野郎」「久しぶりだな、バカ野郎、何やってたんだよ」とか、心配しているのか怒っているのかわからない。

「昨日、お前ずつと電話したんだよ、バカ野郎。何やってたんだよ」なんて。

それに「バカだね、この人は」なんて、女の人に言われるとちよつと嬉しくなる。

「もう本当にこの人はバカで困っちゃう」とか親愛の情まで含まれることがある。

だから、おいらがバカを連発しても、そう目くじらを立てず、そこには豊かなニュアンスもあるんだってことをわかっていただければ、新潮社へのクレームも減るだろう。

言葉のニュアンスもそうだけど、バカには良いバカと悪いバカがある。

可愛げのあるバカや愛すべきバカがいる一方で、空気読めないバカ、嫌われるバカ、バカの中のバカとか、バカにもいろいろある。

中でも一番たちが悪いのは、自分がやっていることがバカだとわかっていないバカ。要するに、バカとしか言えないようなバカのこと。

芸人を擁護するつもりはないけど、おいらたちはお笑いのためにバカやっている。それが社会への風刺やアンチテーゼになっているかはわからない。けれど、それで客を笑わせてギヤラまでいたただくのが、おいらたち芸人だ。それが社会のガス抜きになっ

て、「あいつら本当バカだな」なんて、笑ってもらえればそれは本望なんだ。

つまり、芸人にとっては、バカであることが武器になる。

だけど、社会全体がバカになったら、やっぱり困っちゃうよね。

日本はかつて真珠湾攻撃とかインパール作戦とか、バカとしか思えないことを国を挙

げてやっちゃった過去がある。時としてこの国は、社会全体が阿波踊りのような状態になって、バカ踊りしちゃうから油断ならない。

「鬼畜米英」だったのが、すぐ「ギブミーチョコレート」なんだから、その変わり身の早さつたらない。本当に変な国だよな。

だからバカはおいらたち芸人ぐらいいにして、日本全体がバカにならないように願っている。そのためには、何がバカか、どのようにしてバカが生まれるのかについて考える必要があって、本書がそのきっかけになればいい。

というのが、さんざんバカと言ってきた、おいらのバカな言い訳——ということ、おしまいにしておこう。

